



グローバリゼーションと南アジア芸能の実践者たち

まつかわ きょうこ
松川 恭子
奈良大学准教授

メディアの多様化は人と情報の移動を促し、文化や社会構造にまだかつてない大きな変化をもたらしている。しかし、その変化を生み出す要因は異国の情報を仕入れ、受容することのみにとどまらない。現代における伝統の継承と拡散、文化の再構築といった側面を南アジアの芸能をとおしてみたい。



ゴアの劇場前にかかげられた演劇の看板

では、南アジアの社会・文化的側面に、グローバリゼーションはどのような影響をおよぼしているのだろうか。このような問いを立て、組織されたのが、民博の共同研究「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」である。組織の中心は、南アジアにおける儀礼、演劇、舞台、音楽などの芸能研究をおこなってきた文化人類学者たちだ。南アジアの芸能は、特定のカーズト集団に担われていることが多く、宗教とのかかわり合いが深い。芸能の現在をみることで、南アジアの社会構造や世界観がグローバリゼーションの中で変わっていく様も理解できると考えたのである。

観客・鑑賞者の広がり
本研究でひとつ注目しているのは、南アジア芸能の実践者と観客・鑑賞者とのあらたな関係である。現在、南アジア芸能の観客・鑑賞者は、世界中に広がっている。その中でもっとも重要なのが在外南アジア人である。観客・鑑賞者のグローバルな拡大とともに、芸能実践者たちも南アジア地域の境界線を越える。それにもない、実践者と鑑賞者の関係も変化する。たとえば、西部インド・ゴア州の大衆劇が、アラブ首長国連邦ドバイのゴア人コミュニティのために上演される。この場合、対象となっているのはゴア出身の人びとであり、ゴア社会独自の演劇の様式が、観客とのあいだに共有されている。いつばう、欧米在住の南アジア系移民のコンサートに、インド人演奏家が招へいされる場合、そこで演奏家にとって重要なのは、移民二世・三世が自身のルーツを投影できる「南アジアらしさ」をどのように提示するかである。
更に、「南アジア」外の観客・鑑賞者による芸能の消費に対して、芸能実践者たちが従来のパフォーマンスとは異なる形で対応するケースが近年増加している。たとえば、インド北西部、ラージャスターン州の楽士集団の歌謡が、「ジプシー音楽」や「インドの伝統音楽」としてヨーロッパ

ドバイで買った「インド音楽」CD
わたしの目の前に三枚組みのCDセットがある。「インド・完全ガイド」というタイトルで、イギリスの会社が発売元である。確か二〇〇八年にアラブ首長国連邦ドバイの空港で、搭乗便を待っているあいだに購入したものだ。一枚目にはインド映画の名曲、二枚目には芸術的なアコースティック音楽が収録され、三枚目は「デシ（南アジア系）・ビートと更に……」と題され、ジャンルの枠を超えたさまざまな曲が収められている。二枚目、三枚目にはイギリスや北アメリカで活躍するインド系歌手の曲が並んでいる。たとえば、二枚目のCDの冒頭には、イギリス生まれのナジマ・アクターと、インド生まれ、カナダ育ちのキラン・アフルワリアの曲が並んでいる。二人の女性歌手が他に発表している曲を知ろうと思えば、インターネットにアクセスし、動画投稿サイトで検索すればよい。イギリスで製作された「インド音楽」のCDを日本人が湾岸諸国で購入し、聴くというこの事例は、確かに、世界のさまざまな地域が相互につながり、グローバリゼーションとよばれる地球規模の一体化現象を端的に示しているように思われる。



ロンドンにあるインド文化学校のシタール授業風景 (撮影・岡田恵美)

グローバリゼーションの社会・文化的側面
二一世紀に入ってから一〇年以上が経った現在、一九九〇年代初頭に経済自由化の方向に舵を切ったインドをはじめとする南アジア地域において、グローバリゼーションの影響がさまざまな形で顕在化している。ただ、これまでの研究は、おもに経済的・政治的側面に関心を寄せてきた。日本で報道されるのも、アメリカの電話会社のコールセンターがインドにあり、インド人従業員がアメリカなまりの英語で顧客に話す、H&Mやユニクロといったファストファッションの縫製工場がバン格拉デシユにある、といったおもに経済的なグローバル化の断片についてであることが多い。

で受容されている。彼らの音楽がCDとして販売され、ニューヨーク、パリなどの都市で大掛かりなコンサートが開催されている。コンサートの模様は、インターネットの動画投稿サイトでも閲覧可能である。メディアの影響力も、グローバリゼーションの中の南アジア芸能を考えるうえで重要な要素である。

このように、芸能実践者たちは、これまでのローカルな社会関係の枠を超えた観客・鑑賞者とのやりとりの中で、芸能を変容させている。南アジア地域においても、インド都市部の中産階級が、より「インドらしい」芸能を求めるといった嗜好の変化がみられる。幅広い観客・鑑賞者の要望を実践者たちがどのように解釈し、芸能実践として実現させているか、そして、芸能が変容していくなら、これまでの「伝統的」な技能や知識の継承はどうなるのかといった問いを、実践者たちの視点から考えていきたい。

共同研究
「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」
代表・松川恭子
2011年10月～2015年3月
第2回研究会を3月初旬に開催する予定。